



『アルツハイマーという奇跡』

白鳥 俊著

夫婦の愛は苦労を超えて

老人性痴呆の病名は意味不明な認知症に変わり、下位分類も変わり、病者への対応の視点も大きく変遷してきた。かつては精神病理学と神経組織病理学が手を携えて研究していたが、1980年代になって、高齢社会の到来とともに、ぼけは全面的に「介護」の問題となって今に至っている。

介護とは、心身に障害のある人に対する日常生活の世話である。「世話」と考えたために、いかに世話するか、

コツ、技術、制度、コストばかり議論され研究されてきた。いつしか病む人と世話する人の精神的交流が忘れられてきた。

アルツハイマー型認知症、あるいはアルツハイマー病といえども、脳神経細胞の変性、壊死、脳の萎縮に対して、その人の人格は向き合い、反応している。急速に進む記憶、思考、感情、意欲などの精神的能力の減退に対し、老人格は悩み苦しみ、当惑し、いら

立ち、不機嫌になり、拒絶し、時に被害的反応もする。周囲の人の様子を見て、見捨てられている、孤立している、放棄されていると思ったりする。いかに老いても、いかに病んでも、衰退していく能力に対し成熟していかうとする人格が反応しているのである。

本書は58歳のころから症状の出始めた妻・千恵子さんが亡くなるまで、15年間にわたる夫・白鳥昇さんの日記を、息子の白鳥俊さんが編集したものである。千恵子さんは2人の息子を育てた後、リズム体操の講師として千葉、東京で活躍していた。昇さんは戦前、働きながら旧制中学、早稲田大学を卒業し、それまで夜間に働いてきた朝日新聞社にそのまま就職(1944年)、発送販売の業務に携わり、彼女が発症する少し前に関連会社に移っていた。根っからの朝日人、古き良き時代の誠実な新聞人だった。



文芸社・1260円

◇しらとり・しゅん 1955年生まれ、東京都出身。NPO法人「ユニオン21」代表。

老後是一緒にいっぱい旅行しようとして約束していた昇さんだったが、64歳ですべての職を辞め、妻の外出を助けるために、この歳で自動車免許を取る。

この時、読んでもらえない妻の心に語り掛けるように、一枚の便箋が日記にはさまれていた。

「いつも笑顔で、へべれけ亭主を迎えてくれたね／今日定年、痴呆のお前がいとおしい／沢山の約束、どうなるの／やっと定年になったのに／どうしたらいいの、痴呆の妻よ」

こうしてアルツハイマー病と診断された目を第2の結婚記念日と定め、最期まで一緒に暮らすと決める。

痴呆の進行は健忘期、不安定期、反応低下の末期へと続いていくが、不安定期の千恵子さんの行動はずさまじい。例えば94年9月11日。「六時起床。風呂に入れと言つ。水なり。外へ出る」としばし短時間。ジュース瓶をタオルに包み持つ。昨日買ったスカートのまま寝ようとする。(略)午前零時四十分、外へ。栄橋の上で雨降りだす。隠れて後をつけるも布佐駅の駐輪場で見つかってしまう。改札前から西口の踏切を通り、豆腐屋前から帰る。自転車を通り、橋上まで追いつく。ずぶ濡れ。二時過ぎやうと寝る」と記す。やがて短期入院やデイケアの使い方を知り、小康、再悪化を経て、末期の反応低下期に入っていく。

千恵子さんの死後、弱った昇さんは入退院を繰り返して、6年後の同じ12月、83歳で亡くなった。後に、息子の知らなかった日記やメモが残された。私たちが本書から、昇さんが一方的に介護したのではなく、痴呆の進行にもかかわらず2人が愛し合ったのだと知る。白鳥昇さんの爽やかな声が聞こえてくる本だ。



野田正彰

が読む

Noda Masaaki

◇のだ・まさあき 1944年高知県生まれ。評論家、精神病理学者。